

2020 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	母親の SNS 上への自己情報の公開に関わる研究 —公開実態の解明と公開実態に関わる要因の検討—
キーワード	①母親、②SNS 上への自己情報公開行動、③発達の検討

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	クワバラ チアキ 桑原 千明
配付時の所属先・職位等 (令和 2 年 4 月 1 日現在)	文教大学 教育学部 専任講師
現在の所属先・職位等 (令和 4 年 7 月 1 日現在)	文教大学 教育学部 准教授
プロフィール	2017 年に筑波大学大学院人間総合科学研究科を満期退学。修士（心理学）。2012 年より関東短期大学子ども学科専任講師。2015 年より文教大学教育学部専任講師。2021 年より同大学准教授（現在に至る）。専門は発達心理学、臨床心理学。子どもの発達（特に社会的な行動）や発達に関わる養育行動・養育態度について、面接やアンケートを用いて研究を行っている。

1. 研究の概要

現在 SNS の利用が一般的なものとなり、養育者による子どもの情報公開についての問題が指摘されるようになってきている。本研究の目的は、主たる養育者となることが多い母親および母親になる可能性がある女子大学生を対象として、SNS 利用実態・SNS 上における自己情報の公開の程度を明らかにし、SNS 利用実態と自己情報の公開の程度に関わる要因を検討すること、および適切な公開行動につなげるための介入プログラムを作成することである。

まず**研究 1**として、SNS 利用実態と自己情報の公開の程度に関わる要因の 1 つとして考えられる「母親としての承認欲求尺度」を質問紙調査とインターネット調査により作成した。次に**研究 2**として、研究 1 で作成した「母親としての承認欲求尺度」を含む複数の要因と SNS 利用・公開状況について、母親と母親になる可能性がある女子大学生を対象に、質問紙調査とインターネット調査で関連要因の検討を行った。さらに**研究 3**では、適切な公開行動を目指すプログラムとして、特に母親属性のうちの「プライバシー意識」と「母親としての意識」に着目し、プログラムを作成し、専門家とともに内容の検討を行った。

本研究の独創性として以下の 2 点が挙げられる。まず 1 点目が研究のテーマとして**養育者の SNS 利用に焦点を当てた点**である。本国における養育者のインターネット・SNS 利用についての研究はいくつかみられるが（前田ら，2013；岡村，2017；武市，2014 など）、自己情報の公開に関する研究は見られない。一方、SNS 上での自己情報の公開についてはすでに検討が進められているため（Christofides, Muise, & Desmarais, 2009；2012；太幡・佐藤，2016；2018；2019）、これらの研究を参考に、母親の SNS 上への自己情報公開に関わる要因として、母親特有の要因と母親特有ではない要因について検討をすることが可能である。次に 2 点目として、**現在養育者である母親だけでなく、今後母親となる可能性のある女子大学生を対象とした点**が挙げられる。女子大学生を加えることにより発達の変化を検討することが可能となる。女性は母親という役割を担うことにより、生活が大きく変化をすることが少なくない。本研究は、女性が“母親になる”という役割や生活変化をどのように引き受けていくのかという、女性の生涯発達の視点からも 1 つの知見を提供することが可能になるのではないかと考える。

2. 研究の動機、目的

総務省（2017）によれば、LINE、Facebook、Twitter 等の SNS を利用している割合は 71.2% にまで上昇しており、特に 20 代は 97.7% がいずれかのサービスを利用している。つまり現代社会において SNS の利用は定着してきており、子育て世代においても、その多くが SNS を利用していることは想像に難くない。実際に、養育者が育児情報入手のためにインターネットを最も利用しているという報告（株式会社ブライトウェイ，2009）や、母親たちがインターネット上のコミュニケーションの場において、子育てや子どもに関わるトピックや画像を交換・共有することなどを通して、他者との心理的交流を求めているとの指摘もある（武市，2014）。また研究者自身が行った研究においても、乳幼児期の子どもをもつ家庭においてメディアを育児で利用することは一般的になっていることが示された（松尾・桑原，2016）。

しかしながら、SNS 上に子どもや養育者自身の言語的情報・画像情報を公開することは危険を伴うと考えられる。特に“SNS 晒されチルドレン”という言葉もつくられたように、養育者が子どもの情報を積極的に公開することで、子どもに危険が及ぶ可能性もある。こうした中で、各学校段階においてはメディアリテラシー教育の必要性が指摘され、実践されているものの、養育者を対象とした実践はほとんどない。したがって、SNS におけるトラブルに親子ともに巻き込まれないよう対策を講じることが急務であり、そのためには SNS 利用状況および SNS 上における自己情報（子どもの情報も含む）の公開実態と、公開状況に影響する要因を明らかにすることが期待される。そこで本研究では、主たる養育者となることが多い母親および母親になる可能性がある女子学生を対象として、SNS 利用実態・SNS 上における自己情報の公開の程度を明らかにし、SNS 利用実態と自己情報の公開の程度に関わる要因を検討することを第 1 の目的とする。さらに、適切な公開行動につなげるための介入プログラムを作成することを第 2 の目的とする。なお、先行研究の概観から、SNS 上での自己情報の公開に影響を与える要因として、母親の一般的な要因としての犯罪被害へのリスクおよびプライバシー意識および、母親としての承認欲求（承認欲求）、母親としてのアイデンティティを取り上げることとした。

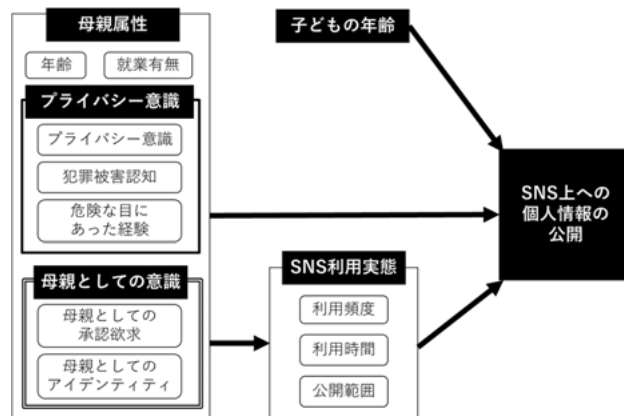


図1 本研究のイメージ

3. 研究の結果

【研究1：母親としての承認欲求尺度の作成】

目的 母親の SNS 上への自己情報公開に関わる要因と考えられる、母親としての承認欲求を測定するための尺度を作成する。

対象 乳幼児をもつ母親 400 名（2 回の調査に回答した対象 298 名）

方法 同一対象に対して 4 週間の間隔をあけて 2 回のインターネット調査を実施した。

調査内容 1) 母親としての承認欲求尺度項目案：賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（18 項目 5 件法；小島・太田・菅原，2003）などを参考に項目を作成した。2) 妥当性検討のための項目：育児ストレス尺度（25 項目，経験頻度 4 件法／経験の程度 4 件法；吉永，2006）、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（18 項目 5 件法；小島ら，2003）を含んだ。

結果 信頼性・妥当性が確認され、「母親としての拒否回避欲求(子育てに関する意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になるなど)」、「母親としての賞賛獲得欲求(人と話すときにはできるだけ、母親としての自分の存在をアピールしたいなど)」の 2 つの因子からなる尺度が作成できた。

【研究2：母親の SNS 上への自己情報の公開実態と関連要因の検討】

目的 母親の SNS 利用状況および公開状況の実態を明らかにするとともに、SNS への公開状況に関連する要因を明らかにする。さらに、母親になる可能性のある女子大学生にも同様の調査を行うことで、実際に子どもをもつことで生じる変化も検討をする。

研究 2-1

対象 未就学児の子どもをもつ 18～39 歳の母親 200 名

方法 クローズド型ウェブ調査

調査内容 1) SNS 利用状況・公開状況について：利用している SNS および各 SNS について利用目的、利用頻度、利用時間、利用歴、自己に関する情報公開の程度を尋ねる。2) SNS 利用に関わる要因について：情報プライバシー（インターネット版情報プライバシー尺度 26 項目 4 件法；佐藤・大幡，2013）、犯罪被害リスク認知（犯罪に対する反応尺度 3 項目 5 件法；新井・吉田，2010）、母親としての承認欲求（研究 1 で作成）などについて尋ねた。

結果 子どもの情報公開行動は SNS (Twitter, Instagram, Facebook) ごとに異なっており、子どもの情報を公開している母親のうち Instagram で公開している者は Instagram 利用者の 88%であった。一方で公開をする場合はほとんどの親が何らかの制限を設けて公開をしていた。また子どもの情報公開行動と関連が認められたのは、プライバシー意識であり、子どものプライバシーに対する意識が高いほど子ども情報を公開しないことが示された。一方で、母親としての賞賛獲得欲求・拒否回避欲求およびリスク認知は子ども情報の公開との間に有意な関連が認められなかった。

研究 2-2

対象 女子大学生 101 名

方法 質問紙調査

調査内容 研究 2-1 と同内容について回答を求めた。子ども情報の公開については「子どもをもったときのことを想像して」と教示して回答を求めた。

結果 子ども情報の公開（想定）については 23.8%の学生が「公開する」と回答していた。プライバシー意識、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求およびリスク認知のいずれも子どもの情報公開（想定）とは明らかな関連は認められなかった。

総合考察 子どもの情報公開行動では、母親特有ではないプライバシー意識が関連をしていることが明らかになった。また、女子大学生とは示された結果が異なっており、子どもをもつこと（母親になること）で意識もしくは行動に変化が生じる可能性が考えられる。

【研究 3：SNS 上への公開行動についての介入プログラムの作成】

目的 適切な公開行動を目指した介入プログラムを作成することを目的とする。特に、母親属性のうち、母親特有の要因である「母親としての意識」と母親特有の要因ではない「プライバシー意識」とに分けて作成することとした。

対象 心理学研究者 3 名（子育てプログラム開発者 1 名、親子関係を主要テーマとする研究者 1 名、SNS 利用を主要テーマとする研究者 1 名）

方法 質問紙調査

調査内容 調査者が先行研究などに基づいて試作したプログラム案（スクリプトおよびワークシート）を提示し、必要な改善点について回答を求めた。

結果 下記の通り「母親としての意識に関わるプログラム」と母親特有の要因ではない「プライバシー意識を高めるプログラム」について、スクリプトおよびワークシートを作成した。

母親としての意識に関わる介入(案) ¹⁾	
【介入計画】 ²⁾	
第 1 回 ³⁾ (45 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →リラックスのためのワーク(深呼吸など) ⁷⁾ 4. →いいところさがし(子どもと自分が似ているところ、子どものよいところ、自分のよいところを探し、共有しあう)の準備(ワークシート1) ⁸⁾ 5. →いいところさがし ⁹⁾ 6. →感想共有 ¹⁰⁾
第 2 回 ³⁾ (45 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →リラックスのためのワーク(深呼吸など) ⁷⁾ 4. →ほっこりさがし(子育てで楽しかったこと、嬉しかったこと、幸せを感じる瞬間を探し、共有しあう)の準備(ワークシート2) ⁸⁾ 5. →ほっこりさがし ⁹⁾ 6. →感想共有 ¹⁰⁾
第 3 回 ³⁾ (45 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →リラックスのためのワーク(深呼吸など) ⁷⁾ 4. →ベアワーク(子育てで頑張っていること、困っていることを共有し、自分と同じだなと思うことを確認し、頑張っているところを認め合う)の準備(ワークシート3) ⁸⁾ 5. →ベアワーク ⁹⁾ 6. →感想共有 ¹⁰⁾
第 4 回 ³⁾ (50 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →リラックスのためのワーク(深呼吸など) ⁷⁾ 4. →こころを休める虎の巻(自分がリラックスするためにしていること)の準備 ⁸⁾ 5. →こころを休める虎の巻 ⁹⁾ 6. →これからの夢(自分が大切にしているもの、今後の目標を確認し、共有する)の準備 ¹⁰⁾ 7. →これからの夢 ¹¹⁾ 8. →感想共有 ¹²⁾

プライバシー意識を高める介入(案) ¹⁾	
【介入計画】 ²⁾	
第 1 回 ³⁾ (45 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →自身が経験したトラブル/トラブルに巻き込まれないようにしている工夫をワークシートに記入(ワークシート1) ⁷⁾ 4. →自身がトラブルに巻き込まれないようにしている工夫の共有 ⁸⁾ 5. →インターネット上に情報公開をするにおけるリスクの紹介 ⁹⁾ 6. →感想共有 ¹⁰⁾
第 2 回 ³⁾ (45 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →トラブル事例の紹介(ワークシート2) ⁷⁾ 4. →どのような危険性があるかを個人で検討 ⁸⁾ 5. →どのような危険性があるかをグループで検討 ⁹⁾ 6. →どのようにすることで危険性を回避できるかを検討 ¹⁰⁾ 7. →感想共有 ¹¹⁾
第 3 回 ³⁾ (45 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →トラブル事例の紹介(ワークシート3) ⁷⁾ 4. →どのような危険性があるかを個人で検討 ⁸⁾ 5. →どのような危険性があるかをグループで検討 ⁹⁾ 6. →どのようにすることで危険性を回避できるかを検討 ¹⁰⁾ 7. →感想共有 ¹¹⁾
第 4 回 ³⁾ (50 分間) ⁴⁾	1. →ファシリテーターあいさつ ⁵⁾ 2. →参加者自己紹介(ニックネーム、子どもの年齢) ⁶⁾ 3. →トラブル事例の紹介(ワークシート4) ⁷⁾ 4. →どのような危険性があるかを個人で検討 ⁸⁾ 5. →どのような危険性があるかをグループで検討 ⁹⁾ 6. →どのようにすることで危険性を回避できるかを検討 ¹⁰⁾ 7. →感想共有 ¹¹⁾

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究から、母親が SNS 上に子どもの情報を公開する要因として、母親特有ではないプライバシー意識があることが示唆された。一方で、女子大学生を対象にした調査では、今回検討を行ったいずれの要因との関連も示されなかった。本研究の課題を踏まえ、今後は効果検討を行った上で、養育者や養育者となる前の青年を対象にした支援に活用できる教育プログラムの作成を目指したい。

私は現在、子どもの発達だけでなく、子どもを育てる親の発達にも興味をもって研究に取り組んでいる。本研究も親としての育ちを理解し、支援する際の一助となることを目指している。今後も子どもを対象とした研究、養育者（親）を対象とした研究、養育者になる可能性のある学生を対象にした研究を展開し、子どもやその家族の豊かな発達を支援できる環境づくりに貢献していきたい。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

日本私立学校振興・共済事業団およびご寄付いただきました関係者の皆様、調査に協力してくださった皆様、この度はお力添えをいただき誠にありがとうございました。今回いただいたご支援により、母親の SNS 上への子ども情報公開行動に関連する要因の検討ならびに適切な公開行動を目指す介入プログラムの作成を行うことができました。ご理解、ご協力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。コロナ禍においては、直接人を対象に研究を実施することは困難を極めましたが、若手・女性研究者奨励金を頂いたことで、インターネット調査を活用し、ここまで研究を進めることができました。私自身も困難な状況の中でなお研究を進めることができたことで、状況に応じて思考し、行動する力を磨くことができたと考えております。

今後は子どもやその養育者の発達を支援する一助となれるよう、研究を進めるとともに社会へ還元できるよう努めてまいります。この度は誠にありがとうございました。今後ともご理解、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。